

# 郵便的想像力

## —フォークナーと郵便—

沖野 泰子

広いアメリカで人と人を細かくつなぐネットワーク網といえば、郵便制度が挙げられるだろう。近年、電子メールの普及で地位を奪われてしまった感があるが、それでもアメリカの人と人を、地域と地域を結びつけていることにかわりない。開拓時代、もちろん電話などなく、コミュニケーションの手段は手紙だけ、通信販売という制度がなければ、人々は生活用品も手に入れないような地域もあったのだから、郵便は日常生活に密着していたのである。車の普及によって、商品を通信販売で購入するのではなく、店へ出かけて行って購入することが地位を示すことになったというのだから、その密着ぶりも想像に難くない。現代でも例えば旅行記作家として名高いビル・ブライソンが、コラム集『ドーナツをくれる郵便局と消えゆくダイナー』の中で、「ニューイングランドの古びた小さな町に住む喜びの一つは、そういう町にはたいてい古びた小さな郵便局が存在するということだ」と書いている。

ではその郵便制度を上手に取り込んだ作家がいる、といえば、だれが挙げられるだろう。文学作品の中で、手紙が大切な小道具になるもの、あるいは書簡形式の小説などはたくさんあるが、郵便制度そのものが生かされている作品となれば、珍しいのではないだろうか。さてその作家、ウィリアム・フォークナー、である。もちろん『八月の光』、『サンクチュアリ』といった作品で有名なノーベル賞作家だが、大学時代に授業で読んだ「エミリーのバラ」の作者、何やら訳のわからない物語を書く作家としてご記憶の方も多いのではないだろうか。

まず、その「エミリーのバラ」の中から、フォークナーがいかに郵便制度を作品に取り込んだか、簡単に述べてみたい。フォークナーは、自分の故郷ミシシッピ州、オックスフォードをモデルにヨクナパトーフア州、ジェファソンという架空の町を作り上

げ、この町を舞台にした作品を多く残している。「エミリー」の舞台ももちろんこのジェファソンである。物語中で語られるジェファソンの住人だったエミリー・グリアソンにまつわるエピソードの一つに郵便の無料配達をエミリーが拒否した、というものがある。では、無料配達制度(Free Delivery)、とは何か。アメリカではもともと受け取り側も配達人に料金を支払い、郵便物を受け取るしくみになっていた。それが、切手をはり、受け取り側は無料で受け取ることができるようになったのは、1863年のことである。ただし、このときはまだ49の都市に限られて実施され、本格的な地方への普及はRural Free Delivery(RFD)の始まる1898年まで待たなくてはならない。それまでは、農民は郵便物を町まで取りに行かなければならなかったのである。フォークナーは、この歴史的な事実をうまく物語に取り込んでいる。郵便の無料配達を受けるため、番号を割り当てられるということは、自分が町の住人たちと横並び、同列になることだから、エミリーの行為はそのことへの拒否ともとれるし、南部の小さな町の名家は、古きよきアメリカ南部を体現しており、北部を中心に始まった郵便制度を受け入れることを拒否することは、北部的なものが入り込んでくることを拒否していると取れるかもしれない。

では、数多くのアメリカ作家の中で、何故フォークナーがこのように郵便制度そのものに着目しているのだろうか。一つには、若いころのフォークナーの体験に基づいているとも考えられる。フォークナーは、一時期、オックスフォードのミシシッピ州立大にある郵便局で郵便局長をしていたことがある。怠け者の局長で、評判はあまりよくなく、すぐに辞職するはめになったが、その時代に、郵便に対する関心が多少なりとも芽生えたのかもしれない。のちに、インタビューに答えて、自分の故郷が描くに値

するものだと述べた際も、町を「切手ほどの小さな町」と表している。オックスフォードは確かにどこにもある、小さな田舎町で、小ささといい、アメリカ中どこにもありそうな何の変哲もない町の様子といい、切手の例えはうまい比喻と言えよう。アメリカ国内どこでも同じ切手が販売されているのはあたりまえのことだが、その切手は消印が押された瞬間、世界でただ一つの切手になってしまうのである。いや、切手としてでき上がった瞬間に、世界でただ一つの切手になる可能性をもつ、と言ってもいいかもしれない。フォークナーの故郷も、外見は他の小さな町と同様何の変哲もない田舎町だとしても、フォークナーから見れば世界でただ一つの特別な町なのである。

それではさらに詳しく一つの作品を見ていきたい。先に述べた『エミリーのバラ』は、発表されたのが1930年だから、作家活動の比較的初期の作品と言っていいだろう。今から述べる『尼僧への鎮魂歌』は、1950年に発表された作品なので、フォークナーはその作家生活の中で、継続的に郵便制度に関する関心をもっていたと言ってもいいかもしれない。『尼僧への鎮魂歌』は、散文の部分と戯曲の部分が交互に3つずつ描かれた、いわば実験的な形式の作品である。第1幕の散文部分には、ジェファソンの町ができた経緯が描かれている。そして町ができた経緯には郵便制度が深く関わっているのである。

少し長くなるが、筋を述べておく必要があるだろう。まだ町はなく、集落であった時代、盗賊が捕らえられた。その盗賊を丸太小屋に一晚閉じ込めておかなくてはならなかったので、郵便物を詰めた袋につけている錠を戸に取りつけた。もともとこの錠は、集落の個人の持ち物だったのだが、郵便袋の保管のため借りていたのである。ところが盗賊たちは、どういう訳か一晚のうちに逃げてしまった。しかも錠前ごと、戸も消えうせてしまったのである。錠前を弁償しなくてはならないと思案する住人たちの前に、さらに難題を吹きかける男が現れる。郵便をこの集落まで運んでくるジェファソン・ベディグリュウという男である。この男は、錠前は自主的に合衆国に寄付されたものであると言い、合衆国の備品を無断で使用し、しかも紛失したからと法外な弁償金を要求する。集落の人々は、ベディグリュウを説得し、なんとか事を丸く治めるため、彼の名をつけた町を作

ることにしたのである。

南北戦争以前、まだアメリカがイギリスから独立したばかりのころ、郵便は馬でラッパを吹き鳴らしながら運ばれていた。ベディグリュウもまた同じ姿で描かれている。そして郵便制度は、初代大統領ワシントンによって、フィラデルフィアで始められた。いわば、典型的な北部の制度なのである。つまり、郵便物がナッシュビルから運ばれるにしても、北部、アメリカ合衆国の制度を通し運ばれるのである。さらに、ベディグリュウのファースト・ネーム、ジェファソンは、母親が第3代大統領トマス・ジェファソンにちなんでつけたものである。しかも語り手は、法外な弁償金を要求してくるベディグリュウを「どこにも存在する」、「測りがたい連邦制の重みを持ち込む」、「政府そのもの」、「この瞬間には自分自身がアメリカ合衆国そのもの」である男と述べている。つまり、南部の典型的な田舎町ジェファソンには、成立のときから、北部の、連邦の影が見え隠れするのである。

このとき南部人である町の人々は、合衆国政府をどのように考えていたのだろうか。『尼僧』の中に、「人々は政府を、自分たちが創設に力を貸し、誇りを持って受け入れた。しかし自由人として、いついかなるときでも、両者がもはや両立しないと知りえたときには、その政府から自由に手をひくことができる」という表現がある。つまり、町の人々はあくまで合衆国と自分たちとの関係を緩やかな共存関係としてとらえていたと言っていいだろう。南北戦争以前、『風とともに去りぬ』の中でも見られるような独自の文化が花開いていた南部は、合衆国の一部であると同時に、独立国家的な要素をもっていた。

しかし、この共存関係は、南部経済を支えていた奴隷制度を巡って対立関係へと変化したことはよく知られている。南北戦争で荒廃した南部は、北部化することで、地域を再生させようとする。南北戦争から物語の現在にいたるジェファソンの町のように、第3幕の散文部分で描かれているが、ここでも語り手は、外見的には北部の町となんらかわりなくなってしまうジェファソンを描き出す。ラジオから伝わってくるのは、「ヨクナパトーフアの空気」ではなく、「アメリカの空気」であり、その音は「2000マイル離れたニューヨークやロサンゼルスから届く」のである。「一つの国、一つの国民」にジェファソン

の町と人々は組み込まれる。物語の初めに見られた連邦の影は、今や町全体を覆い、町の成立が郵便制度と係わりがあることは、この町がやがて連邦の中へと組み込まれていくことを、物語の初めて見事に暗示していたことになるのである。

次に、この郵便制度をとおして届けられる手紙をフォークナーはどのように描いているのか少し見てみたい。例えば先に述べた「エミリーのバラ」の中では、税金の支払いを請求する手紙がエミリーの元へ届けられる。南部の名家であるグリアソン家に対して設けられた税金控除の特典は、町の住人の中でも若い世代の者たちには、不公平にうつる。その結果、上記の公文書がエミリーの元へ届くのだが、「ジェファソンでは、私は税金を免除されております」として、エミリーはこの要求を一蹴してしまう。毎年送られる税金の請求書は、受け取り請求者がいない(“unclaimed”)として、郵便局から返送され続ける。ジェファソンの町で、エミリー・グリアソンを知らぬ者はないはずなのに、何故届かないのかという疑問は、郵便制度とunclaimedという語を思い出せば、容易に解決できる。宛先不明なのではなく、受け取り手がないのである。郵便制度をとおして厄介を持ち込む手紙、南部のしきたりではなく、連邦の制度にのっとって送られた手紙は、郵便制度を逆手にとったエミリーによって拒否されたのである。

さらに、『尼僧』の中では、戯曲の部分に手紙が登場する。この手紙は登場人物の一人テンプル・ドレイクが、以前、レッドという情人に送った恋文で、この手紙をネタにテンプルをゆすろうとしたレッドの弟と、テンプルは駆け落ちしようとするのである。これを止めようとして、黒人の召使女ナンシー・マニゴーは嬰兒殺しの罪を犯すのである。戯曲部分はナンシーの裁判と、何故ナンシーが罪を犯したかをテンプルが告白する形で進んでいく。ここでも人の意志を伝える大切な手段であるはずの手紙が厄介の種になっている。

では、もしかしたら北部すなわち連邦(合衆国)が生み出した郵便制度を介さない手紙なら厄介を引き

起こさず、別の意味合いをもってくるのではないかと仮定して、『尼僧』の中にそれが描かれていないかを探してみよう。結論から先に言うと、答えは描かれている、である。第3幕散文部分で描かれる連邦化したジェファソンの町に古くから残っているものが一つある。それは監獄である。南北戦争で、町の中心にあった建物は壊されてしまったが、この監獄だけは「生き残って」、町の発展も荒廃も急速な変化も見届けてきたと語り手は述べている。南北戦争のころ、看守の娘がこの建物の窓ガラスにダイヤの指輪で「セシリア・ファーマー、1861年4月16日」と引っかけ傷のような署名を残している。物語の現在で、ジェファソンを訪れた北部からの旅人が監獄に立ち寄り、看守からこの署名を見せられ、南部の昔語りを聞いたとしよう。その旅人が署名を見つめている間に、それが「目の前で動き、合体し、視覚以外のもう一つの感覚に入り込んでしまう」と感じる。さらに、外へ出たとき、語り手は旅人に、「手遅れだ…あなたの知っている道に戻るには、連邦(“The United States”)に戻るには…」と説明し、「はるか昔から、距離なき声が聞こえる、聞け、旅人よ、これが私自身だった、これが私だったのだ、と。」とも述べている。「時間もなく、空間も、距離もなく」、言い換えれば、時を、空間を越え、第六感に聞こえるセシリアの声は、郵便制度を介さない、古きよき南部からのメッセージであり、このメッセージを伝える監獄は、連邦化したジェファソンの町の中で特殊な空間であることを示している。これは一見、連邦の影に覆われているように見えつつ、逆に南部が北部人旅行者の意識に入り込んでいるとも言えよう。

フォークナーは多くの作品において、北部化、連邦化の進む中、まだなお残る南部人の誇りを浮き彫りにする。そうしたフォークナーの想像力を刺激し、有効な文学的意匠となりえたものこそ他ならぬ郵便と郵便制度だったのである。

(甲南大学非常勤講師)